

御殿の奥の花鳥 ～〈白書院〉四の間・帳台の間～

重要文化財（絵画）二条城二の丸御殿障壁画の大半は、徳川家三代将軍家光（1604-51）の時代、寛永3年（1626）の二条城大規模改修に伴い、狩野派の絵師たちによって描かれました。今年度は、「シリーズ転調の花鳥」として、二の丸御殿の各棟の北東にあたる部屋に描かれた障壁画に焦点を当てて紹介しています。各棟の北東の部屋の障壁画は、他の部屋と共通しつつも、異なる特徴を持つ花鳥図が描かれています。

今回の展示では、二の丸御殿〈白書院〉の北東にある四の間の障壁画《雪中梅竹柳小禽図》と帳台の間の障壁画《秋草図》を紹介します。

〈白書院〉四の間と帳台の間の障壁画

二の丸御殿の奥に位置する〈白書院〉は、主人の御座所として使われた棟です。江戸時代は「御座の間」と呼ばれていましたが、明治時代に「白書院」という名前が定着したようです。一の間（上段）のほか、二の間（下段）、三の間、四の間、帳台の間、そして部屋の周囲の入側と入側に接続する付属の間で構成されています。一の間は主人の居室で、他の部屋はこれを補助する役割を果たしたと考えられます。

〈白書院〉一の間から四の間の障壁画は墨画淡彩で描かれており、部屋ごとに画題が異なります。一の間と二の間は山水、三の間は山水人物、四の間と帳台の間は花鳥です。狩野永納（1631-97）が編纂した『本朝画史』によると、障壁画の画題には格付けがあり、山水、人物、花鳥の順に格式が高いとされています。〈白書院〉の各部屋の画題は、この格式に沿ったものになっています。一の間から四の間の水墨画の筆者は、狩野長信（1577-1654）とされます。

四の間の障壁画には、冬の景色が描かれています。雪に覆われ、白く霞む景色の中で、鳥たちが存在感を放ちます。雪山を背景に飛び日雀、竹の上で寄り添う雀、水面をのぞく鷗、積雪の柳にとまる鳴鶴、水辺に群れる鷺。特に、2羽の雀は「眠り雀」として古くから親しまれ、明治19年（1886）の「日出新聞」で二の丸御殿の名画の一つとして紹介された記録もあります。ここには、〈大広間〉に描かれた孔雀や錦鶏鳥などの珍しい鳥、鷺や鷹といった勇壮な鳥でなく、雀や鷗といった素朴な鳥が描かれています。凜とした寒さの中で健気に生きる鳥たちの姿は、静かさと穏やかさを感じさせます。さらに、寒々しい冬景色の中で花開く椿や梅が、たくましい生命の息吹を添えているのです。

帳台の間の障壁画には、〈白書院〉の他の部屋が墨画淡彩で描かれているのに対し、濃彩や金箔が用いられ、秋の情景が表現されています。長押の上下で絵が分かれており、上には紫苑と石竹の花が、下には紅白の萩や女郎花、金箔押しの柴垣などが描かれます。下から湧き上がるように生い茂る萩は、余白を活かして描かれ、秋寂びの雰囲気を感じさせます。

二条城行幸（寛永行幸とも）に際しての〈白書院〉改造

二条城は、慶長8年（1603）に徳川家康（1542-1616）によって築城され、寛永3年の後水尾天皇（1596-1680）の二条城行幸に際して、もともとの姿に手が加えられました。二の丸御殿は、3代家光のための御殿として大改造され、〈白書院〉も、この時に大きく手が加えられました。現在の四の間と帳台の間は、かつては二の間として一室だったものを分割し、二つの部屋へと再構成されたものです。創建当初は東側にあった二の間（現在の帳台の間と四の間）は、一の間の南側へと変更され、それに伴い、一の間の設えも変更されました。以前は西側に床が向かって右、違棚が向かって左に配置されていましたが、現在のように北側に床が向かって左、違棚が向かって右となりました。

〈白書院〉は、もとは主人が西を背にして東を向くようになっていましたが、この大改造で南向きになるよう改められたのです。主人が北を背にして南向きに座するという中国の考え方は、古くから日本に取り入れられ、公式な対面所は、そのように整えられました。二の丸御殿の〈大広間〉と〈黒書院〉の対面所も、もともと主人が北を背に南面するようになっていました。〈白書院〉がこのように変更された理由を明確に述べることはできませんが、居室である〈白書院〉に、公的要素が取り入れられたからかもしれません。

こうした建築の変更は、障壁画にも影響を与えました。戸襖の一枚（正面に向かって右側に展示）は、帳台の間と四の間に共有されています。これは、もともと一室だった二の間を帳台の間と四の間に分ける際、東西に柱四間分ある幅を、帳台の間は一間半、四の間は二間半になるよう区切った跡です。改造に伴い描きなおされたこの戸襖には、向かって左側に帳台の間の薄と女郎花が、向かって右側に四の間の雪をかぶった梅の枝と竹が描かれました。一枚の戸襖を柱で隔てて二部屋にわたって使うものであり、そのため異なる二つの絵が描かれているのです。秋草と水墨画の間にある幅20cmほどの変色箇所は、柱の陰に隠れていた部分です。

四の間と帳台の間に、ひそかに宿る花鳥。その静かな命を知るのは、御殿の主人と身の回りの者だけ。穏やかな時が流れる空間が、二の丸御殿の最奥に息づいているのです。

降矢 淳子（元離宮二条城事務所学芸員）